
第一章

freeman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一章

【Nコード】

N5559BA

【作者名】

freeman

【あらすじ】

2020年、アメリカ政府はそれまでの科学的な法則や一般常識を“全く無視した力”『第七感』の存在を“とある出来事”を機に世界中に公式発表した。

その圧倒的な力を目の当たりにし、世界は震撼し同時に各国はその強大な力を国力に取り入れようと第七感の研究に着手し開発競争が始まった。

8年後の2028年、アメリカから日本へ一人の少年が使者として送られる。

プロローグ：ダイビング

―西暦2028年、8月18日、現地時間午後11時27分―

サウジアラビア西部、ヘジャス地方の都市メッカ。イスラム第一の聖地であるこの都市の上空21000メートル上を一機の軍事輸送機が飛行している。

「間もなく降下地点に到着します。」

薄暗い機内の後部座席に座っている男が立ち上がり、声を掛けてきた。

迷彩柄の戦闘服を着ている身長180センチは優に超えている大柄な男だ。その外見から彼が軍人であることは誰が見ても分かるだろう。

「わかった。」

返事をして立ち上がったのは男の正面に座っていた人物。

男とは違い、黒を基調とした赤いラインが入っている軍服のようなものを着ている身長170センチくらいの黒髪の少年である。

手には黒一色で統一され眼部にV字型のバイザーが付いているマスクがある。

立ち上がるとそのまま機内の後ろへ歩みを進め、後方ハッチの前で足を止める。

「ハッチ開きます!」

背後にいる男が手に握っているレバーを上げるとハッチが開き始め、機内に耳を塞ぎたくなるような風切り音とともに冷たい風が流れてくる。

「ふう、寒っ!」

寒さで体を身震いさせるとすぐさまグローブをはめ、手に持っていたマスク顔にあてる。

『ブーン』

するとマスクが機械音を発し、変形し始め、ついに少年の頭全体を

覆いつくした。

ハッチが完全に開くと眼下には見渡す限り暗闇に染まった夜空が広がっている。しかし少年の視界にはそれだけでなく、これから向かう“戦場”へのナビ情報がバイザー部分のモニターを介して視野に映っている。

「ではまた回収地点でお会いしましょう。」

『ああ。』

マスクに内蔵されているマイクから発せられる、本来のものより少し機械音が混ざった声で返事をするそのまま大空に身を投げた。

その瞬間、黒一色のバイザー奥の二点が“赤く”光りだす。

少年が飛び降りたのを確認すると、男はレバーを下げる。ハッチが完全に閉まると機内は静まりかえった。

「パラシュート無しで飛び降りるなんて・・・イカれてやがる。」

非現実的な状況を目の当たりにして男は思わず呟いてしまった。

第一話：後日談

『ハアイ、任務ご苦勞様。スカイダイビングは楽しかった？』

散々聞きなれた愉快的口調の声だ。

「あんなの寒いだけだ。風邪引いたらどうしてくれるんだ。」

疲れ切った口調で愚痴をもらす。

『まあそう言わないでよ。『サンプル』の所在を突き止めたところまではよかったんだけど、なんせアレは軍が極秘裏に開発していた代物だから万が一事が外部に漏れたらウチの国は批判的にされちゃうの。そこで証拠湮滅の必要があったからわざわざアナタに出向いてもらったの。』

「そんなことは知ってる。で、朝っぱらからなんだ？まさか労いの言葉をかけるために電話してきたわけじゃないよな？」

『察しがいいわね。昨日実戦で使ったマスクあったでしょ？アレがどこにもないって開発部門の連中が騒いでるんだけど、アナタここにやったの？』

「ああ、アレね・・・捨てた。」

『・・・マジ？』

「ああ、マジだ。」

「なんで捨てたのよっ！開発費いくらかってるか知ってるのッ！？」

「かぶつてると邪魔で仕方がなかったんだ。俺の給料からその分引いていいから。てゆうかも切つていいか？寝てないんだ。」

『・・・色々言いたいことはあるけど、とりあえずこれだけは伝えておくわ。次の任務が決まったわ。』

「早いな。で、次は何させるんだ？」

『任務内容は・・・以上。何か質問は？』

「・・・なあ、それマジ？」

『マジよ。』

女は含み笑いで言った。

― 8月19日、午前9時45分―

通話を終えて液晶画面の表示を一瞥すると適当にスマートフォンを投げ捨ててまた布団を被る。

現在、アメリカ合衆国・ペンシルベニア州・フィラデルフィア郊外にある二階建ての一軒家。

家に着いたのは9時半頃だった。疲れていたので帰りの機内で寝ようとしたが、けたたましいエンジン音や飛行中の揺れでどうも寝つけなかった。やっと自室のベッドで寝られるとシャワーも浴びずに布団を被ったとき、見計らったようにスマートフォンのバイブレーションが鳴った。

相手は仕事の上司。その上司から次の任務について聞かされたわけだが・・・その内容を聞いたら眠気が失せてしまった。

「・・・とりあえずシャワー浴びるか。」

立ち上がり自室を後にする。一階の脱衣所へ入ると着ているものをその場に脱ぎ散らかし、浴室に入る。

シャワーのコックをゆるめて頭から温水を浴びる。

「・・・あいつに伝えないといけないな。」

ボーとしてシャワーを浴び続けていると

「お兄ちゃん、帰ってきたの？」

ドアの向こうの脱衣所から声が聞こえてきた。

「あ、ああ。さっき帰ってきたんだ。」

「そっなんだあ、お疲れ様。おかえりなさい。」

「ああ、ただいま。」

「・・・私もシャワー浴びようと思ってただけど・・・」

「ああ、わりい。俺はもう出るから少し待って——「私もいつしょに入っていい?」・・・はあっ!?!」

直後、ドアが開く。

そこにいたのは全身にバスタオルを巻いた少女だ。白く透き通った肌に華奢な体つき、身長は少年より頭一つ分ほど低い。腰の辺りまで伸ばしていつでもはツインテールにしている少し茶目っ気のかかった柔らかそうなストレートの黒髪を今はほどいている。パツチリと大きく、透き通った黒い瞳に小さく形のきれいな鼻、そしてかわいらしい笑みをこぼしている口元。タオルで目視できないが体はまだ発展途上といったところだろう。だがそこには間違いなく誰もが認めるであろうとてもかわいらしい印象を持った美少女がいる。男ならば誰もが興奮するシチュエーションだろう。そう、それが『妹』でなければ。

「・・・なんで入ってくるんだよ、綾^{あや}。」

面倒そうな表情で呟く。

「えー！なにその反応っ!?リアクション悪いよお。」

ぷくーと頬を膨らませる妹。

すると少年を見ている彼女の視線は徐々に下がっていき途端、顔を真っ赤にして声を上げた。

「な、ななななんでタオル巻いていないのっ!?お兄ちゃんっ!?!」

「逆になんで巻くんだよ。」

思わず呆れてしまう。

「い、いいからっ！早くこれ巻いてっ!」

目元を手で覆い、顔を逸らし少年にタオルを突き出してくる。

「おまえホントなんで入ってきたんだ。」

そう言いながらもタオルを受け取り、腰に巻く。

「も、もう巻いた?」

「ああ、巻いたよ。」

返事をする少女は目元から手を放し、ゆっくりと少年の方を向く。

まだ顔は赤いままだ。

「じゃあオレは出るよ。」

そう言い浴室を出ようとすると

「ま、待つて!!」

呼び止められた。

「ん?なんだ?」

「そ、そこに座って!背中流してあげるから・・・」

風呂椅子を指さして言う。

「いや、いいよ。別に。」

「いいからっ!!」

声を張り上げ、目をつり上げて少年をじーと見てくる妹。このパターンは黙って言うことを聞いた方が後で面倒事が増えないことを学んでいる少年であって、

「・・・わかったよ。」

諦めたように言われた通り風呂椅子に座ると正面の鏡に映る少女の表情がぱあっと明るくなった。

石鹸が泡立っているタオルで丁寧に背中をこすりながら嬉しそうな声で話しかけてきた。

「なんかこうしていると昔を思い出すね。小さいころよく二人で流し合いっこしてたよね。」

「そうか?」

「もっつ!忘れたの?」

「うゝん。記憶にないな。」

「えゝ!?!うそ!?!ありえないっ!」

「なんで責められなきゃいけないんだよ。そんなことよりほら、代わってやるよ。」

「ええっ!?!」

「だから背中流してやるって言ってんだ。昔もよくやってたんだろ?」

鏡を見ると顔をほんのり赤く染め、恥ずかしそうな表情をしている

少女と目が合う。

「そ、その、嬉しいけど変なトコさわらないでね。ま、まだそこま
で心の準備が・・・」

最後に何かボソボソ呟いてたが背中を流しているシャワーの音でか
き消された。

「さわるかよ・・・あ。」

そこで突然あることを思い出した。

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや、実はな綾、お前に大事なことを伝えなきゃいけないんだ。
くるりと体を反転させ、正面から少女の瞳を見据える。

「え？な、なに？」

少女は顔をほんのり赤く染めたまま俯き、落ち着きない様子でたず
ねてくる。

「ホントは後で言おうと思ってたんだが、もうここで言うておこう
と思ってな。」

（今のこいつはけっこう機嫌が良さそうだからな。）

「そ、それって・・・！」

急に顔をぱつとあげて期待の籠った目でこちらを見つめてくる少女。

「実はな・・・」

「う、うん・・・」

恥じらいと期待の混ざったような表情の少女だったが、少年の次の
一言でその表情が崩れた。

「来週から日本で暮らすことになった。」

第二話：サブライズ

― 8月24日、正午12時37分、太平洋上空を飛行中の小型旅客機の機内―

「お飲物の御代わりはいかですか。」

機内にいる唯一の乗客にブロードヘアーのキャビンアテンダントがたずねてくる。

「綾、何か飲むか？」

「・・・いらない。」

ぶすつとした表情で言う綾。

「そ、そうか・・・なら俺もいいや。」

「かしこまりました。何かご用がありましたらお呼びください。」

意味ありげな笑みを浮かべるとモデルのような足取りで去っていくキャビンアテンダント。

「・・・」

その後ろ姿を見ていると左足の脛に激痛が走る。

「っ！痛つてー！何すんだよ、綾！」

正面の席に座っている綾が机の下から蹴りをかましてきた。

「ふん！何見とれちゃってるの。だらしない。」

軽蔑したような眼差しでこちらを見ってくる。

「いや、別に見とれてたわけじゃ・・・」

「うそっ！ジーとおしりを見てたじゃんっ！」

「いや、確かにキレイな人だとは思ってたけどそんなことは断じてしていないぞ。」

「お兄ちゃんのスケベ。」

「・・・なあ、まだこの間のこと怒っているのか。」

「別に怒ってないもん。」

（・・・はあ）

思わずため息が出てしまう。

時を遡ること5日、8月19日、自宅の浴室で日本で暮らすことになったことを告白した直後だった。

「・・・・・・」

体をブルブル震わせる綾。

「ど、どうした綾！？」

「わ、わわわたしのお・・・・・・」

かすれたような声だが、そこに怒気が含まれているような気がするのは勘違いだろうか。

「あ、あの綾さん？」

「わたしのお・・・・・・かえせえ・・・・・・」

「わたしの？かえせ？」

「わたしのときめきをつ！かえせー！ー！！」

ドゴッ

直後、頬に強い衝撃がきた。それが華奢でかわいらしい少女から繰り出されたパンチだと誰が予想できようか。

「ぐはっ！」

パンチの衝撃でその場に倒れこむ。

「もう、知らないっ！！」

そのまま浴室を出て行った綾。

その後、何度も謝ったが「わかってないっ！」の一点張りで結局今日まで機嫌が直っていない。だが、日本で暮らすことには特に文句とか言ってこないからもしかしたら別のことで怒っているのかもしれないが、心当たりが全くないのでお手上げ状態だ。
(そろそろか。)

「なあ、綾。」

「・・・なに？」

頼杖について、窓の外の景色を見ながら素っ気なく返事する綾。

（まだ怒ってるなあ。）

「ちよつと左手を出してくれ。」

「え？なんで？」

疑問を浮かべた表情で少年を見る。

「いいから。」

「う、うん。」

わけがわからないといった様子で左手を差し出してくる。その小さな手を取り、細い薬指に『あるもの』をはめる。

（よし。ピッタリだな。）

「え？これって・・・。」

左手の薬指にあるのは細いシルバーの指輪で真ん中に赤く光る石が埋め込まれている。

「うわあ、すごきれい！」

「お待たせいたしました。」

そこへ先ほどのキャビンアテンダントがきた。手に持っているトレイにはシャンパンの入ったグラスが2本と16本の火のついたロウソクがささっている小さめのホールケーキがある。

それらを手慣れた手つきでテーブルに置いていく。

「ではごゆっくり。」

「ありがとうございます。」

再びモデルのような足取りで去って行った。

「ほら、ロウソクの火を消して。」

まだ混乱してる様子の綾だが

「う、うん。はあー、ふうー。」

息を吸い込んで懸命に火を吹き消す。苦戦しながらもすべての火を消した。

パチパチと拍手をする。

「16歳の誕生日おめでとう、綾。」

「あ、ありがとうっ!!お兄ちゃんっ!!」

今にも抱き着いてきそうな勢いで身を乗り出し、満面の笑みを浮かべている。

「喜んでくれてよかった。CAの人に頼んでサプライズした甲斐があった。」

「・・・それでさっきからあのCAさんの方を見てたの?」

「まあ、こういうのはタイミング大事だつてよく言うからな。」

「・・・ごめんなさい。わたし勘違いしてさっき酷いこと言つて、それにこの前の事も・・・勝手に1人で怒つてお兄ちゃんを困らせて・・・わたしってほんと子供だね・・・」

落ち込んだ表情で俯いてしまった。

「・・・いやあ、この前のことは俺が怒らせてしまったんだから（原因はわからないが）気にするな。それにお前はまだ16歳なんだから子供でいいんだよ。」

当たり前のことを言つたつもりだったのだが

「ぶうー。だったらお兄ちゃんも16歳だから子供だよっ!」

と頬を膨らまし、こちらをジーと見てくる。

（・・・子供か）

「ああ、そうだな。」

とりあえず話を合わせておいた。

「でもこの指輪・・・ホントきれい。特にこの赤い石っ!お兄ちゃんの瞳と同じ色で・・・すっごく素敵。」

頬を赤く染め、うつとりとした目で指輪を見ている。

しかし正面に座っている少年の瞳の色は彼女と同じ黒だ。

「ねえねえ、今日のわたしどうかナ?」

何か期待を込めたような表情でたずねてきた。

今日の髪型は腰まであるツインテールで服装は白の少し大人っぽいノースリーブのワンピースである。肩の露出で白い肌が日焼けは丈夫なのかと少し気になったが外では上に袖のあるボレロを羽織る

そうだから大丈夫らしい。

「とてもきれいだよ。」

思ったことをそのまま口にした。

「嬉しいっ！！なんかこうしてるとプロポーズの指輪もらったみたいだねっ！」

これ以上ないくらい幸せそうな笑みを浮かべている。こんな笑顔を見られると

「そ、そうか？そうかもしれないな。」

否定なんてできるわけがない。

「この指輪ずうっとつけて大切にするねっ！」
指輪を撫でながら言う綾。

『まもなく成田国際空港へ到着します。』

そこで機内アナウンスが流れる。

「そろそろ着くな。早くケーキ食べちまおう。」

「うんっ！」

二人ともグラスを手に持ち、同時に唱和した。

「「かんぱい！！」」

第三話：到着

小型旅客機が成田国際空港に到着して現在、待ち合わせ場所の出口へ行くため第一ターミナルの中を歩いてるわけなんだが・・・

「なあ綾、そんなにくつつかれると歩きにくいんだが。」

「えゝ！いいじゃんっ！」

と少年の腕に自分の腕を絡めている綾が上機嫌にこたえる。どうやらあの指輪がよっぽど気に入ったらしい。

「それに周りの視線が気になるんだよ。」

さつきからすれ違う人のほとんどがこちらを見てくる気がしてならない。

「だったらみんなにわたしたちのラブラブっぷりを見せ付けちゃおうよっ！お兄ちゃんっ！」

そう言うのとさらに絡めている腕に力を入れてくる。おかげでさらに体が密着し、肘に胸が当たっている。

（・・・それじゃあ逆効果だろう。）

そんなやりとりをしながら歩いていると第一ターミナルの出口へ着いた。

「たしかこの辺だっって言ってたよな・・・」

あたりを見回すと近くに一台の高級車が止まってある。すると助手席から誰かが降りてこちらに向かって歩いてくる。

「お待ちしておりました。お会いできて光栄です。雅式戦事官^{みやびしき}。私はサオス・日本支部でああなたの補佐をさせていただくことになりました工藤結理^{くとうむつり}といいます。」

笑みを浮かべてあいさつをしてきたのはスカートタイプの黒いスーツを着こなしている見た目は20代前半くらいの女性だ。身長は青年より少し低いくらいで、落ち着いた雰囲気のある目元に形のきれいな鼻、ピンクの口紅を塗っている品を感じさせる唇。顔全体の化粧も薄くて、化粧なしでも全然いけそうだ。そしてウェーブのかか

った背中まである黒髪をなびかせていてまさに「デキる大人の女」の雰囲気を漂わせている。

「あ、どうも。はじめまして。アメリカ本部から来た雅式です。こっちは妹の綾です。ほら綾、あいさつしろ。」

と綾にあいさつをさせようと声をかける少年・雅式だが

「・・・雅綾です。」

式の腕にしがみついたまま小さな声で言う。

（・・・またか）

その様子を見ていると心の中でため息をついた。

「すいません。こいつ人見知りなんで、ちょっと緊張してるみたいで。」

「フフフ。とても仲が良いんですね。それより、こんなところで立ち話もなんですから車にお乗りください。長旅で妹さんもお疲れでしょうから。」

そう言い、微笑む工藤さん。こういう大人の対応が綾もできるようになると自分の気苦労も減るのだが。

「そう言っていたけると助かります。綾、車に乗ろう。」

「・・・わかった。」

つまらなそうな表情の綾。まだまだ大人の対応はできそうにない。

2020年、アメリカ政府はそれまでの科学的な法則や一般常識を“全く無視した力”『第七感』の存在を“とある出来事”を機に世界中に公式発表した。

その圧倒的な力を目の当たりにし、世界は震撼し同時に各国はその強大な力を国力に取り入れようと第七感の研究に着手し開発競争が始まった。

さらに同年、国際連合総会で『世界平和のために第七感の有効利用と管理を行っていく』という名目で、アメリカに陸軍・海軍・空軍・海兵隊・沿岸警備隊（通称：五軍）とは異なり国防総省や国家安全保障省の管轄下に属していなく独自に指揮権を有している、第七感を戦力の主軸とした戦略機関『SAOSS（サオスStrategic Agency Of Seventh Sense）』の設立を承認した。

そしてアメリカの政治を司るワシントンD・Cと国際連合本部があるニューヨークとの間のほぼ中央に位置するペンシルベニア州・フィラデルフィアにサオス・アメリカ本部が構えられた。さらに東京湾上の第24特別区にある東アジアを担当する日本支部、ニュンベルクにあるEU圏を担当するドイツ支部、サンクトペテルブルクにある東ヨーロッパを担当するロシア支部があり、これらの四機関は拠点を置いてる国家が運営権と戦時における指揮権の全てを有していて、それぞれが互いに連携を取りながら成り立っている。

―現在日本支部へ向かっている車内―

乗っているのは先ほどの三人にドライバーを含めた計四人。

助手席に座っている工藤結理に後部座席に座っている式と綾なのだが

「・・・綾、いい加減に離れろって。」

「いやっ。」

いたずらっぽく笑みを浮かべ車に乗ってからもがっしりと腕を取り、体を密着させてくる妹に困り果てている兄の姿がそこにあった。

その様子をミラー越しに見ていた工藤結理は思わず小さく笑う。

「ホントに仲がいいんですね。そうしているとラブラブのカップルみたいですよ。」

その言葉を聞い途端、綾がビクンツと跳ね、上機嫌な顔で式の顔を
見上げてくる。

「・・・お恥ずかしい限りです。」
力ない声でそう言った。

サオス・日本支部は千葉市、浦安市、市原市の臨海部に囲まれている東京湾上にある巨大人工浮島にある。元々この巨大人工浮島はこの日本支部や訓練場、研究機関や施設を設置するために建設され、約縦7キロ、横12キロの長方形の敷地には大企業のオフィス街や市街地、学校や住宅街なども多くある。

日本政府はこの地域を東京都23区に次ぐ第24特別区と名づけ、『24区』と呼ばれている。位置的には千葉県にあるのだが名義上は東京都で通っている。24区への一般アクセスは幕張から架かっている『ノースブリッジ』とその下を走っている『ノースモノレール』、新浦安から架かっている『ウエストブリッジ』とその下を走っている『ウエストモノレール』、五井から架かっている『イーストブリッジ』とその下の『イーストモノレール』、最後に東京湾アクアラインを改築してつくられた『サウスライン』と羽田空港から走っている『サウスモノレール』の4方向8通りの手段がある。船舶や航空機も行き来しているがその8割が物資の運搬などに使われているので実質この8つが主な交通手段だ。

幕張からノースブリッジを通った一行の車は24区の中へ入り、現在中心街を通っている。高層ビルや商業施設が立ち並び、とても賑わっている様子だ。中心街を過ぎると景色は変わり建物の数が減っていき、目の前に果てしなく終わりが見えないほど横が長い塀が見えてきた。車はそこにあるゲートの前で止まるとドライバーが門番に通行許可書を見せ、許可されると車は塀の中に入って行く。中には研究施設や訓練施設と思われる建物があり、大きなグラウンドなどもある。そして車が進んでいくにつれ、その建物ははっきりと見えってくる。

サオス・日本支部

上空からみるとそれはアメリカ国防総省ペンタゴンにならったように七角柱の外観になっている。ただし国防総省に比べ、面積が小さい分高さがある。地上から見てもその外観の全体が見て取れやすい。

先ほどあった塀はこの日本支部や研究施設や訓練施設を取り囲むように正七角形になっており、一般道路とつながっている七つの角にあるゲートが唯一の出入り口である。

この日本支部が24区のだ真ん中にあり、それを取り囲んでいる塀の中の敷地面積は24区の約6分の1を占めていてその周りにオフィス街や繁華街や市街地、学校などがある構造になっている。

車が日本支部の正面玄関の前で止まると、「ここから中に入りましょう。」と言といわれたので車から降りる。

正面玄関の前に立ち止まってる二人にウェーブのかかった髪をなびかせながら振り返り、笑顔で工藤結理は言った。

「ようこそ、サオス・日本支部へ。」

第四話：サオス・日本支部

正面玄関をくぐり、中へ入るとまず空港によくある金属探知機と駅の改札機が合体したような機械が広いフロアの端から端まで十数機ほど横一列に並んでいるのが目につく。

「これは上と横にあるセンサーが身体と持ち物に危険物を持ち込んでいないか感知し、刃物や銃火器、爆発物、あと解放状態の『第七感』に反応するのでここから先は緊急時以外第七感の使用禁止されています。ウイルス感染していないスマートフォンやパソコンなどといった通信機器や普段から日常生活で身に着けていたり持ち歩いている範囲のものなら機械が自動で判断してくれるので引かかることはありません。そして改札機と同じようにここにある画面にIDをかざすと認識して通ることができます。この2つのうちのどちらか1つでも引つかかるとブザーが鳴り、係りの者が来て検査をするようになるのでご注意ください。」

説明を終えると二人にそれぞれのIDを渡してきた。

「わかりました。」

「では行きましょうか。」

3人とも機械を難なく通り、少し歩くと正七角形の大広間に出る、そこから上を見るとはるか高い天井まで吹き抜けになっている。

そこからだんだん人通りが多くなり、先ほどからすれ違ったり立ち止まってる職員たちの視線がこちらに注がれているのがなんとなくわかる。

「なんかみんなこっち見てるね、お兄ちゃん。」

いまだに腕を組んで隣を歩く綾も気づいたようだ。

（・・・お前の行為がその原因の一端であることは俺の心にとめておこう）

確かに若い男女がこんなところで腕を組んで歩いていると周りにいる職員たちもそちらに視線が行ってしまうのも無理はないだろう。

ただそれだけならば空港で浴びた仲睦ましい男女を見ている衆人の視線と同じなのだが、今ここで浴びている視線に込められているものは少し異なる。

そこに込められているのは好奇心、あるいは恐怖かもしれない。

（まあ、どうでもいいが。）

「・・・やはり職員の視線が気になりますか？」

前を歩いている工藤さんが申し訳なさそうな顔を向けてたずねてくる。

「そんなことはありません。慣れていきますから。」

作り笑いを浮かべる。

「それならいいんですが・・・皆あなたを見て興奮してるんだと思います。あなたは“この世界”で有名ですから。」

「はあ、そうですか・・・それにしても工藤さんは妙に落ち着いていますね。」

ただ彼女の雰囲気について正直な感想を述べただけだったのだが「そんなことはありません。こう見えて私も先ほど空港でお会いした時から今もずっとドキドキしてるんですよ。」

今までとは違うどこかいたずらっぽい笑みを式に向ける。

（いや、その言動は少し誤解を招くんじゃ——）

直後、左の二の腕に激痛が走った。

「痛っ！痛いつて、綾っ！」

無表情で腕を組んだまま俺の二の腕辺りを両手で思いつきりつねっている妹。

その小さな手の一体どこからそんな力が出てくるのだろうと恐怖する兄だった。

それから日本支部・局長室に案内され、現在、中にいる人物と面会

している。綾と工藤さんは外の待合室にいる。

「8年ぶりか。見ない間にずいぶん大きくなったな、式。」

「お久しぶりです。あなたは変わっていませんね、海場さん。」
見て思ったことをそのまま口にする。

「そうか？だが俺も今年でもう49だぞ。それよりどうだ、向こうでの生活は？」

「まあ普通に暮らしていますよ。」

「ははは、普通か。それは何よりだ。」

うすら笑いを浮かべているのは銀色フレームの眼鏡をかけている黒い短髪の男。

身長は180センチほどで中肉中背の体格に黒いスーツを着ている。強い何かを宿している切れ長の目は只者でない雰囲気を感じさせる。この男が日本支部の全指揮権を任されているサオス・日本支部局長、かいば そうじ海場宗次である。

「サウジアラビアでの任務、映像を見せてもらったよ。相変わらず桁外れな力だな。今回は頼んだぞ。期待してるからな。」

相手のことをよく知り、信頼しているような口調で海場は言う。

「俺はやるべきことをやるだけですよ。」

「そうか。まあ“やりすぎない”ようにくれぐれも頼むぞ。はははっ。」

笑いながらとんでもないことを言ってくる。

「……気を付けます。」

そのころ待合室で待っている綾と工藤結理の二人はと言うと

「「……………」」

終始無言状態。

（何か話しかけた方がいいかしら。）

「綾さん。のど渴きませんか？何か飲み物でも飲みますか？」

「いりません。」

キツパリと断られた。

「そ、そうですか・・・。」

（さっき怒らせちゃったのがまずかったのかしら。）

先ほどの言葉は式の言葉にノって場を和ませるつもりで言ったのだが、どうやらそれが彼女の機嫌を損ねてしまったようだ。

（まあ緊張してたのはホントだけど・・・）

彼女の役目は式の日本滞在中に任務だけでなく生活面においてもサポートをすることであり、それは目の前の少女とも接点を持つことを意味するので、初日から『頼りがいのあるおねえさん』キャラで行き、いい信頼関係を築いていこうと意気込んでいたのだが

（あ——！やっちゃったあ——。妹が超ブラコンなんて聞いてないわよお。）

最先是芳しく^{かんば}ないようだ。

そんなこんなで頭を抱えていると

「あの、工藤さん。」

綾が話しかけてきた。

「な、なんででしょう？」

「その、お互い敬語使って話すのやめませんか。これから長い付き合いになるかもしれないし、きつと兄もその方が気が楽でいいと思います。」

「そ、そう・・・ならそうしましょう。」

突然の提案に戸惑いながらも賛成の意を示す。

「なら私の事は結理って呼んで。私も綾ちゃんって呼ぶから。」

「わかった、結理さん。」

少し表情をやわらかくしてこたえる綾。

（よかったあ。少し距離が縮まつたらしら。）

安堵に浸っていると綾が唐突にたずねてきた。

「結理さんっていくつ？」

（えー？いきなりそこ来る！？）

「・・・26歳だけど。」

「ふうん。なら問題ないかな。」

「・・・どういう意味かしら？」

「恋人とかいるの？」

「・・・いません。」

なぜか恥ずかしくなり体を縮こませる。

「ん、まあまあ」キレイだと思うんだけど・・・どうしてだろ？」

頬に手を当て、首をかしげている綾。

「・・・」

思わず拳に力が入る。

（・・・ここは耐えて、大人の対応をしないと）

「綾ちゃん、さっきから“聞き捨てならない”言葉がきこえてくるんだけど、一体なんでさっきからそんなこと聞てくるのかなあ？」

「そんなの決まってるよ。お兄ちゃんに近づく女はみんな把握しておくためだよ。」

さらっと恐ろしいことをおっしゃる。

「い、いや、あ、あのね、私はお兄さんに対してそんな感情は抱いていないよッ。お兄さんとはあくまで仕事での付き合いになるし・・・」

「・・・あっち（アメリカ）でもお兄ちゃんに言い寄ってきた女は最初はみんなそんなこと言ってた・・・特に年増は。」

「とっ、年増ですってえ——！？」

いきなり結理が机にばんつと手を付き、勢いよく立ち上がり、室内に声が響く。

「ほら、そういう反応。おばさんっぽい。」

指さして言う綾。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔になる結理。

（この小娘えゝ。！）

（落ち着け・・・落ち着くのよ。ここで取り乱したら負けよ。）

「い、いい綾ちゃん？綾ちゃんみたいな子供にはまだ早いかもしれない内容だけど、女つてのは私くらいの年齢が一番“おいしい”年頃なの。それに自慢じゃないけど私、スタイルには結構自信があるから思春期のお兄さんにはちょっと刺激を与えちゃうかもしれないけど、その・・・きは許してねッ。」

腰に手を当て、勝ち誇った顔で綾の顔を見下ろす。

「・・・・・・・・」

表情を変えず沈黙を守っている綾。

（フッ、勝った！）

勝利を確信した結理だが綾が口を開く。

「お兄ちゃんには綾がいるからそんなことありえないもんっ。」

綾が爆弾を投下した。

「・・・・・・・・え？綾ちゃん・・・それはどういうこと？」

「私の体から心まで全てのものはお兄ちゃんのモノなんだからっ。」

もちろんお兄ちゃんの全ても私のモノだけだねっ。」

きやつきやつ言いながら頬を赤く染めている目の前の少女。

「へ、へえ・・・そうなんだあ。」

（なんか・・・バカバカしくなってきた。）

「うんっ。だからお兄ちゃん他女には興味なんて持たないから結理さんに欲情なんてしないよ。それより結理さんもう三十路前なんだから早くイイ人見つけた方がいいと思うよ。」

（三十路前ですって！！）

「・・・私“まだ”26なんだけど！」

「女の20代なんてあつという間だよ。」

もつともなことを言われてしまった。

「・・・こういう仕事しているとあんまり出会いがないのよ。」

「ふうん。まあとにかくお兄ちゃんは私の旦那さんだから手

出ししても無駄だよ。」

「旦那さんって……でもあなたたち兄妹じゃない。」

（いくら好きだって言っても……）

「これ見て。」

すると綾が左手の薬指にはまっているものを見せてきた。

「……すごくきれいな指輪ね。」

「ねっ！すごくきれいでしょっ。」

たしかにとてもきれいな指輪だ。細いシルバーのリングに魅惑的な輝きを放つ赤い石。

「コレねッ、今日私の誕生日なんだけど、ここに来る飛行機の中でお兄ちゃんにもらった婚約指輪なのっ。」

（それは“誕生日プレゼント”って言うんじゃ……）

そうつつこまずにはいられない結理であつたが至福の表情で指輪に魅入っている目の前の少女を見てると色んな意味でそんなことを言う気が失せた。

「それにね、結理さん。」

急に表情を変え声を発する綾。

「『兄妹は結婚できない』なんて常識はわたしのお兄ちゃんに対する愛の前では何の意味も持たないよ。そんなの無視してぶっ壊せばいいんだから。」

色っぽい美しい笑みを浮かべ彼女は言った。それは“恋する少女”なんて可愛らしいものではなく何かドロドロとしたモノを感じさせる“オンナの顔”だった。

このとき工藤結理は悟った。

目の前にいるこの少女も彼女の兄と同じく“普通ではない”と。そして、これから“波乱の毎日”を送ることになるだろうと。

第五話：隣人

―午後6時すぎ―

「ここが今日からあなたが暮らす5002号室よ。」

24区の中心街に一棟の高層マンションが立っている。このマンションは日本支部の職員のために立てられたもので多くの職員がここに住んでいる。

その最上階にある部屋のリビングに今式と綾と結理さんの三人はいる。

海場との面会を終え、局長室をあとにして二人の待っている待合室に行ってみると名前呼び合っている二人が打ち解けたような口調で会話していた。どうやら互いに敬語口調はやめたようだ。式としてもこれからお世話になる年上の女性に敬語を使わせるのはあまり気分がいいものではないので任務時以外は敬語はやめてもらうことにした。その後、結理の車でマンションまで連れてきてもらった。「わぁー！見て見てお兄ちゃんっ！すごいよっ！」

窓の外の景色を見てはしゃぐ綾。

「ほんとだな。」

最上階だけあって窓から眺める景色はなかなかのものであって24区を一望することができる。

間取りは2LDKと二人暮らしには十分な広さで、家具家電も備わっていてすぐに生活ができる状態だ。

「じゃあ私はこれで、二人とも今日はお疲れ様。」

「今日はいろいろありがとうございました。これからよろしく願います。」

「こちらこそよろしくね。式君。」

笑顔でこたえる結理。

「そういえば二人とも今日は晩御飯の準備してないでしょ？」

「あっ、そういえば・・・」

「よかつたらウチで晩御飯食べない？そうね・・・7時くらいはどうかしら？」

「え？でもそんな悪いですよ。また車で送ってもらうことになりま
すし・・・」

すると結理が小さく笑って言った。

「フフフ、その心配はないわ。私は隣の5001号室に暮らしてい
るから。」

「ええっ！」

それに過敏に反応したのはいままで窓から外の景色を眺めていた綾
だ。

（・・・まあ粗方予想はしていたが・・・）

「・・・今日はお言葉に甘えてご馳走になろうかな。綾もそれ
でいいよな。」

「・・・別にイイけど」

まだ納得していない感じで返事する綾。

「じゃあ7時にねっ。待つてるから。」

「わかりました。では7時にお邪魔します。」

結理は隣の5001号室へ帰っていった。

「ああ、緊張したあ。」

脱力してリビングのソファーにもたれかかる。

（『結理さん』か・・・）

自分の事をそう呼ぶ今日会ったばかりの少年の事を頭に浮かべる。
数多くのアメリカ敵対組織を殲滅してきた『人間兵器』。

けど私の目に映る彼の印象はそんなものとはかけ離れていた。

落ち着きのあり、部下である私に対しても謙虚な態度で、甘えてくる妹に苦笑しながらもやさしく接する『人間のできた面倒見のいい兄』という印象を受けた。

そこで彼の補佐を任命されたときに局長に言われた言葉を思い出す。

「今回の件、本部の連中は“何か”隠していると私は考えている。でなければリスクを負ってまで“あいつ”を国外に出すわけがない。」

「・・・あいつ？」

「局長は雅戦事官と面識があるのですか？」

「ん？まあな。最後に会ったのは8年前だな。」

（8年前・・・）

「というわけで、君には彼の補佐に加えてその動向にも目を見張ってもらいたい。」

「・・・監視ということでしょうか。」

「そこまで堅苦しいものではない。ただ何か不可解な行動を起こした時は常時報告をくれ。」

「・・・わかりました。」

「くれぐれも子供と思って見ない方がいい。“アレ”は正真正銘の化物だ。」

「化物ねえ・・・」

（まっ、今はとりあえずお客さんとしておもてなしすることを第一にかんがえるでしょうっ！）

「おねえちゃん。帰ってきたの？」

するとリビングに入ってきた少女が声を掛けてきた。

「うん。ただいまぁ。」

「おかえりなさい。そういえば今日だっけ？お客さんがくるの。」

「そうだよ。アンタも一緒に食事するでしょ？」
「・・・どうせイヤだって言ってもダメなんでしょ？」
「イヤなら別にいいよ。その代わりきつと後悔するわよ。」
「えっ？なんで？」
頭に？を浮かべてたずねてくる。
「フフフ。それは後でのお楽しみッ。」
思わず笑みがこぼれた。

午後7時、綾と5001号室のドアの前に立ち、インターホンを押す。

「はい。」

すぐにドアが開き結理さんが出てきた。

「いらつしやい。さあ二人とも中に入って。」

「お邪魔します。」

「・・・おじゃまします」

靴を脱ぎ、リビングへ入るとスマートテレビ（インターネット検索などコンピュータの機能を取り込んだテレビ）やソファ、豪華な料理が並んでいる四人掛けのダイニングテーブルがあり、他にも生活雑貨などが多くあり、明るい雰囲気のリビングだ。

「散らかってるけどゴメンねっ。」

「そうですか？とてもきれいにしていると違いますよ。」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。もうお料理はテーブルに置いてあるから適当に座ってちょうだい。あとは“あの子”を呼んで来れば食事を始められるから。」

「・・・あの子？」

そこで式と綾の声が八もった。

するとリビングにあるもう一つの扉が開き、誰かが入ってきた。

「おねえちゃん、もうお客さん来——」

そこで入ってきた人物と目が合う。

身長は綾より少し高いくらいで、学校の制服を着ていて肩まで伸ばした黒髪に赤いフレームの眼鏡をかけている。目元はどこか控えめな雰囲気を感じさせ、きれいな鼻筋に形の整った口元、全体的に大人しそうな印象を受ける美少女だ。

（なんか結理さんに似てるような・・・娘か？）

すると目があった彼女が口をあんぐりと開けたままこちらを見て固まっている。

「きゃ・・・」

「きゃ？」

なにか言葉を発したかと思うと

「キャ――！！！！」

リビングに悲鳴が響き渡った。

「ホント、美紀ったら。なんにも悲鳴あげなくったっていいじゃない。」

「そう言い笑う結理。」

「だ、だって・・・ホントビックリしたんだもん・・・」

恥ずかしげな表情で顔を赤くして俯く先ほど悲鳴をあげた美紀と呼ばれてる少女。

「そんなのいきなり叫ばれた二人の方がビックリしたに決まってるよあ。だよねえ？式君。」

楽しそうな表情でたずねてくる結理。

「まあ、たしかに驚きましたね。」

苦笑いを浮かべる。

現在、四人はダイニングテーブルの椅子に座っている。

キッチン側に結理と「美紀」と呼ばれていた少女が隣に座り、結理

の向かいに綾、その隣に式という位置だ。

彼女は顔を赤くし、ちらちら式の方を見ては視線を下に向けている。そしてなぜか無表情になってテーブルの下で式の腕をつねっている綾。

（……オレ、何かしたか？）

「じゃあ紹介するわね。この子は私の妹の美紀。あなたたちと同じ16歳よ。ほら、美紀。」

「え？え、えつと……い、妹のく、工藤美紀ですつ。えつと……第一高校に通っていますつ。あ、あの……さ、さつきはすみませんでしたつ！……よ、よろしく、お、お願いします。」

頭をペコリと下げ、たじたじのあいさつを終えると、恥ずかしそうにしながら俯く。

（人見知りなのか？）

「いや、別に気にしてないよ。俺は雅式と言います。アメリカから来ました。よろしく。こっちは妹の綾。綾も、ほら。」

「……雅綾です……よろしく。」

これまた素っ気ない態度の綾。あいさつくらいきちんとできるようになってほしいのだが。

「さあ、自己紹介も済んだことだし、乾杯しましょ。」

そう言つてジュースの入ったコップを手に取る結理。美紀も顔を赤くしたままそれにならつて、綾も仕方なさそうに、そして式もコップを手に取る。

「では二人の来日と“私たち”の引越し祝いにかんぱい。」

「……かんぱい。（？）……」

そこで式は思わず？を浮かべる。

「さあ、食べましょ。式君も綾ちゃんもいっぱい食べてね。」

「は、はい。いただきます。」

「……いただきます。」

フォークとナイフを使ってハンバーグを口に入れる。

「……っ！」

「うまい。」

「・・・おいしい。」

二人同時に言葉がでた。

「このハンバーグ、すごくおいしいです。」

「それ美紀が作ったのよ。」

誇らしげに結理が言う。

「美紀さん料理上手いんだね。」

正面の美紀に賞賛の言葉を贈る。

「えっ？い、いやそんな・・・大したものは作れません・・・ちよつとできるくらいです・・・」

目が合うまた頬を赤らめ俯く美紀。

「式君は料理するの？」

そこへ結理が聞いてくる。

「いえ、暇なときに綾に教えてもらいながら作るくらいです。料理はいつも綾がしてくれてます。」

そう言つて自然と綾の頭を撫でると頬を赤らめ、照れた顔をして式を見る綾。

「へえ、なら式君も仲間だね。私なんてからつきし作れないよお。」

結構ヘビーなことをさらりと言う。

（あれ？今俺の中の結理さんのイメージに亀裂が入ったような・・・まあ今の時代、できない人だっているか。）

無理やり納得することにした。

そして気になっていたことをたずねることにした。

「あの、結理さん。」

「ん？なに？」

「さつき乾杯の時、『私たちの』引越し祝い』って言いましたよね？」

「うん、そうだね。」

「あれは一体どういう意味ですか？」

「あ、言つてなかったかしら？ 実は私たちもおとといココに引越してきたばかりなのよ。」

（・・・なるほど、そういうことか。）

「すみません。俺のせいで面倒な手間をかけさせてしまつて。」

恐らく彼女たちはこの任務のためだけに住む場所を変えさせられたのだろう。

「そ、そんな式君が謝ることないのよ。むしろこっちは感謝してるくらいだし。」

「そ、そうですっ！ もともとホントだったらおねえちゃんみたいな“下っ端”のお給料でこんないところに暮らせるなんてありえないし、私はその・・・すごいありがたいですっ！ ありがとうございますっ！」

バツと頭を下げてくる美紀。謝つたつもりがなぜかお礼で返されてしまった。そしてサラリとひどいことを言つた。

「そうですか・・・けど任務が終わつた後は？」

「前暮らしていたマンションと同じ家賃でいいて言つて下さったの。しかも任務が終わるまで家賃はタダでいいて。」

嬉しそうに話す結理。

「そういうことを子供が心配するもんじゃないわよ、式君。」

やさしい笑みを向けてくる結理。

「・・・これでもオレはあなたの上司ですよ、結理さん。」

「あら、これは失礼しました。雅戦事官殿。」

（・・・なんか楽しそうだな。）

「にしても美紀、たしかに私の稼ぎじゃココに住むのは無理だろうけど、“下っ端”は酷すぎるんじゃない？」

口を尖らせ、不満そうな口調で抗議する。

「それを言つたらおねえちゃんの方が酷いよお。どうしていきなりこんないところに住めるようになったのか気にはなつてたけど・・・お二人が来ることくらい前もって教えてくれてたつてよかったじゃない！ おかげで私は大恥かいちゃったよお・・・」

今にも泣きそうな顔で訴える美紀。

「ゴメン、ゴメン。でも美紀の驚いた顔をどうしても見たかったのよ。見事予想以上の反応してくれたから私は大満足よッ。」

（確信犯はあなたですか、結理さん。）
くすくす

（ん？）

隣を見るとオレと二人きり以外のときはあまり笑わない綾が小さく笑っていた。

（・・・ここにきて正解だったかな）

その笑顔を見ると心のどこかで安心した。

結理の次の言葉を聞くまでは

「それによかったでしょ？憧れの式君に会えて。」

次の瞬間、笑っていた綾の顔はピキッと固まり、目つきが変わる。
同時に式は戦慄した。

第六話：夕食にて

結理が衝撃発言をした次の瞬間、美紀は顔をボツと赤くし、涙目で抗議する。

「お、おおおねちゃんっ！な、ななな何言ってるのっ！」

「あれえ？じゃあ美紀は式君に全然興味ないんだあ。」

からかったような口調で言う結理。

「そ、そんなことないよっ！で、でも本人の前で言うなんてひどいよっ、おねえちゃん！」

とうとう泣き出しそうな声でワーワー嘆く美紀。

しかしそんな二人のやり取りなど全く耳に入っていない式であった。彼の全神経は今、隣にいる彼の妹に注がれている。

（ま、まずい・・・これは・・・嫌な予感がする・・・）

先ほどもで可愛らしく笑っていた綾の顔は時が止まったかのように固まると、目つきが鋭いものとなり、斜め正面にいる美紀さんを睨む。

すると涙目で嘆いていた美紀もその視線に気づいたようで、途端に体をビクリと震わせる。

それはさながら肉食動物とそれに食われることを恐れている小さな小食動物のような構図だ。

「お兄ちゃん。」

すると綾が声を掛けてきた。それがまた二人でいるときによく聞く可愛い声なので余計に怖い。

「ど、どうした？」

背中を一筋の汗が流れたのがわかる。恐らく次に彼女から言われることはろくでもないことに違いない。

「わたし、箸うまく使えないからご飯が食べられないの。だからお兄ちゃんに食べさせてほしいな。」

きた。ある意味、蹴りやつねりより“痛い”パターンだ。

「で、でもな綾。結理さんと美紀さんもいるし、そういうのは行儀が悪いだろ。」

だが式だつてそう易々と聞くわけにはいかない。

「でも、せっかく用意してもらったごちそうを残す方が失礼だと思うけどなあ。ねえ、美紀さんもそう思うでしょ？」

美紀に問いかける綾。

すると美紀は体をビクンと震わせ、「え、あ、あの・・・。」と口ごもる。

「とにかく、食べ物を粗末にするのはよくないよね？お兄ちゃん。」それを無視して締めくくる妹。たしかに言ってることは最もなんだが・・・

「し、しかしだなあ・・・。」

式の反応に綾は不満そうな顔をしてるが次の瞬間、何か思いついたような顔をして言う。

「なら、わたしもカミングアウトしようかなあ。」

「カミングアウト？」

「さつきから結理さんと美紀さんが色々ぶつちやけトークしてるから、私もココは場を盛り上げようと思ってね。」そうだなあ、お兄ちゃんの話にしようかなあ。」

「え、なにに？式君の話？聞きたい聞きたい。」

身を乗り出して興味深々の結理さん。心なしか、美紀さんも興味を持った視線を向けているような・・・

（俺のことでそんな面白い話でもあったか？）

まあそんなことでこの場が治まるなら構わないと思い、

「・・・なら話してみよう。」

と考えもなしに言ったのが失敗だった。

「じゃあ話すねッ。お兄ちゃんが“お風呂場”でわたしに“恥ずか

しいモノ”見せてきた話。」

「「お、お風呂場で！？・・・・は、恥ずかしいモノ！？」」

結理さんと美紀さんの驚愕した声がハモる。二人とも顔を赤くしている。

「いや、待て！綾、その言い方は変な誤解を招く！」

「え？でもホントじゃん。お兄ちゃんが“バスタオル一枚”のわたしに“見せつけて”きたのは。」

「「ば、バスタオル一枚！？・・・・み、見せつけて！？」」

またもや見事にハモる美人姉妹。

「ほ、ホントあのときは恥ずかしかったんだからね・・・・す、すぐに隠してくれなかったし・・・・」

急に顔を赤くし、オーバリアクションで両手の手のひらで顔を覆い恥ずかしそうにする綾。

（ま、まずい・・・・このままでは話がねつ造されたままあらぬ方向へ行ってしまう・・・・）

「な、なあ綾、話もいいけどご飯冷めちまうぞ？た、食べさせてやるからその・・・・いったんその話はやめないか？なっ？」

（てゆうかやめてください・・・・）

式はここで負けを認めたのであった。

「えー？せっかく面白いとこなのになあ・・・・仕方ないなあ。」

あからさまに残念がつている表情をしているが、それが本心に見えないのは気のせいだろうか。

白飯が盛られている綾のお椀を取り、もう片方の手で綾の箸を持とうとすると

「お兄ちゃんの箸でいいじゃん。」

「え？まあお前がそれでいいんならいいけど・・・・」

「ふふふ、あーん。」

小さく口を開けて式の持つ箸を待っている綾。

「あ、ああ。はい。」

白飯を適度に箸で取り、綾の小さな口元へ運ぶ。

口に入った白飯を咀嚼^{そしゃく}して味わう綾。

「ど、どうだ？」

「うん！すごくおいしい。やっぱりたまにはご飯も食べるべきだね。」

「そ、そうか。それはよかった。」

「んふふふ、あーん。」

「あ、ああ。」

それを何度か繰り返して、ようやくお椀が空になった。ちなみにこの最中、結理と美紀はずっと太りのやりとりを凝視していた。

（なぜだろう・・・後ろめたいことをしている気持ちになった。）

ようやく解放され、自分の皿にある、残り一切れのハンバーグに手をつけようとしたときだった。

「待ってお兄ちゃん。」

綾に呼び止められる。

「ん？どうした？」

「さっきのお礼にわたしが食べさせてあげる。」

「え？いや、いい——「食べさせてあげる。」・・・はい・・・」

逃げる隙も与えず綾が同じ言葉を発した。もう抗う気力がそぎ落とされた。

自分のフォークで式の皿にあるハンバーグをとらえるとそれをゆつくりと式の口に運んでいく綾。

「はい、あーん。」

「あ、あーん・・・」

もぐり うん、やっぱりうまい。

「どう、おいしい？」

「ああ、おいしいよ。」

そう言い美紀の方を見ると目があった。また恥ずかしそうに顔で俯

く美紀さん。

「あ、お兄ちゃん、ちょっとこっち向いて。」

綾に声を掛けられたかと思うと両頬を綾の手にガツチリとホルドされ、ゴキッという音とともに首を曲げられ90度視界が変わるとそこには間近に綾の小さな顔がある。

「・・・どうした、綾？」

「ああ、やっぱり！口にハンバーグのソースがついたままだよ、お兄ちゃん。」

「え？マジで？」

それは恥ずかしいと思い、パンツのポケットに入っているハンカチを取ろうとしたときだった。

式の頬を両手で押さえながら綾の左手の人差し指が式の唇になぞるように触れた。

そのまま両手を放すと式の口に着いていたソースを拭い取ったと思われる左手の人差し指を小さな舌でペロリとなめて言った。

「ホントにおいしいよね。“この和風ソース”。」

妖艶な笑みを浮かべて式を見つめている綾。

向かいの椅子に座っている二人の反応を確認するまでもなく思った。
(・・・)

今すぐこの場から消えたいと思った式であった。

「今日はごちそうになりました。本当おいしかったよ、美紀。」

「お、お粗末さまでした。そ、それじゃおやすみなさいっ！し、式くんっ！」

モジモジしながら俯いて言う美紀。

「ああ、おやすみ。」

すると顔を赤くしてそのままダッシュでリビングの方に消えていっ

た。

（やはり人見知りなのか。）

現在5001号室の玄関前。あれからどうにか誤解を解いて食事を終え、綾を先に帰らせ美紀の皿洗いを手伝っていた。

美紀は終始敬語口調だったので、その時にお互い同い年だし敬語はやめて呼びやすいように呼び合おうということになった。

そして美紀が去った今、玄関前にいるのは式と結理の二人だけとなった。

「どう？美紀は？」

「とてもいい子ですね。将来いいお嫁さんになりなすよ。」

「なんならシキ君がもらってあげれば？美紀も喜ぶと思うわよ。」

冗談交じりに笑う結理さん。

「俺にはもつたいないですよ。それよりひとつ聞いていいですか？」

「ん？何かしら？」

「なぜ今回の補佐の任務、請け負ったんですか？」

途端、それまで和やかな空気が一変張りつめたものに変わる。

「……どういう意味かしら？」

「簡単なことです。普通に命が惜しい人間なら俺と一緒に任務に就きたがるわけがない。」

「……これは私が自分の意志で決めたことよ。あなたと一緒に任務に就くことのリスクを“踏まえた上”でね。」

「……結理さんだけでなく、妹さんにも危険が及ぶ可能性がないとも言いきれませんか？」

「問題ないわ。その時は式君があの子を守ってくれるから。ついでに私のこともねッ！」

ウィンクしながらきっぱりとした口調で言った結理。

この時、どうしてこの人がこんなに自分の事を信頼しているのか理解できなかった。

そしてなぜか同時に全く関係ない“あること”を思い出した。

(・・・てゆうかあいつ・・・箸使えたよな?)

第七話：夕食後にて

「ゆ、夢じゃないよねっ！？ほ、ホントに“あの人”がウチに来て私の作った料理を食べたんだよねっ！？」

それだけにとどまらず、名前で呼び合う仲までになってしまった。

「『美紀』……きゃ——！」

思わず枕に顔を押し当て、叫んでしまった。

現在、工藤美紀は自室のベッドでゴロゴロしながら先ほど夢のような出来事を思い返し、一人で興奮していた。

最初にリビングで彼を見たときはとうとう現実の区別がつかなくなってしまうと思うくらいの衝撃を受けて、思わず取り乱してしまった。

さらに食事を始めてからもまともに話ができず、彼と目が合うとあまりの緊張と気恥ずかしさに俯くことしかできなかった。

皿洗いを二人でしたときは隣に彼がいると意識するだけで変な汗をかき、彼に話かけられるまでしゃべることができず、話しかけられたときは危うく皿を落としそうになった。

「はぁ……絶対ヘンな女だって思われただろうなあ……何やつてんだろ私……」

自分の情けない言動に後悔と怒りが込み上げてくる。

しかし、そんな自分にも気を遣ってくれた彼。

そして何よりも

「………かつこよかったなあ。」

170以上はある身長に程よい細さの体格、少し長めの黒髪に凛とした整った顔立ち、そしてあの“瞳”。

「………あのととき」と違って、今日は黒かったけど、黒でもすごく素敵。」

考えただけでウットリしてしまう。

そんな彼が今隣の5002号室にいるのだ。

“彼女”と

「・・・・・・・・」

あんなにかわいい妹がいたなんて知らなかった。

私を睨んできたあの威嚇するような目つき。

そして彼女の彼を見ていたあの目。

あれは兄妹とか家族とかを無視した“オナナの目”だった。

「で、でも・・・・いくら好きだからってさすがに兄妹だし・・・・」

だが言い切ることができない。

今日彼女が自分に“見せつけてきた”彼との異常なスキンシップ。

日頃からあんなことをしてるのかと思うと・・・・

「・・・・・・・・や、やめよう。こんなこと考えるの。」

所詮自分のような大して魅力のない一般人が彼と釣り合うわけがない。

だが本音を言うとしても彼に近づきたい。

「もっと・・・・あなたを知りたいよ、式くん・・・・」

コンコンッ

「美紀、入るわよ。」

「え？うん。」

結理が部屋に入ってきた。

「んふふ、さては式君のこと考えてたんでしょ？」

ニヤニヤしながら冷やかすように言う結理。

「え？い、いや別に考えてないよっ！」

慌てふためく美紀。

「どうだかねえ。それより会ってみて印象はどうだった？アンタの憧れの雅式の。」

「そ、それは・・・・か、かつこいいなあって・・・・でもやっぱり向こうは私に気づかなかったみたい・・・・無理もないけど。」

「まあ8年前の事だからね。美紀もだいぶ大きくなったから彼も分からなかったのよ。」

「私のことなんて覚えてるわけないよ。」

力なく笑う。だがその表情は悲しそうだ。

「……でもまた会うことができたじゃない。8年の歳月をかけて育ったそのおっぱいを使うときがとうとう来たわね。」

美紀の胸を指さして言う。

「な、なんでそこでおっぱいのっ？」

「男を仕留めるためには色仕掛けも必要よ。特に彼みたいに放っておけば女が群がってきそうな男には。アンタは普通にカワイイな」と言ってもその立派な胸があるじゃないっ！」

「私と同じサイズの……」と呟き、悔しそうな表情の結理。

「で、でも無理だよ……そんなの恥ずかしくてできないよっ。」顔を赤くし、俯く美紀。

「アンタそんな悠長なこと言ったら綾ちゃんがどんどん彼にアタックしていつちゃうわよ。今日で分かったでしょ？あの子が式君に抱いてるのは兄妹の枠を超えてる感情だって。」

「……わかってるけど。」

落ち込んでる様子の綾。それを見かねた結理が言った。

「……アンタがそんな様子なら別に私が彼を狙っても罰は当たらないわよねえ。」

相手を翻弄するような口調だ。

それを聞いた美紀がばつと顔を上げ、驚いた表情で姉を見る。

「おねえちゃん……それ本気？」

「どうだろねえ。」

挑発したような目で妹を見る。

「そ、そんなの絶対させないよっ！わ、私だっておねえちゃんに負けないからっ！」

先ほどの様子和つて変わって目に力が籠っている。

「フフフ、その意気よ。頑張りなさい。」

やさしく微笑んで結理は言った。

「ぶえつくしっ！」

自宅に戻り、風呂から上がって頭を拭いているとくしゃみがでた。

「・・・マジで風邪引いたかも。」

心当たりはある。

（ホントあのととき寒かったからなあ。）

「そっぴやこの国での保険証もらってないぞ、アリスのやつ、自力で治せって言うのか。」

寝間着を着終えてリビングへ通ずる廊下を歩きながらそんなことをブツブツ言っていると、妹の声リビングから聞こえてくる。

「おにいちゃん、もうお風呂上がった？」

「ああ、もう上がったよ。」

返事をしてリビングに入ると綾はソファに座っている。

俺が皿洗いを手伝っていた間に入浴を済ませてきたようだ。

「今日はお疲れ様。いろいろ大変だったね。」

「そうだな。綾も疲れただろ？今日はもう寝たほうがいいんじゃないか？」

「えー！やっとお兄ちゃんと二人きりになれたのにー！」

ぱつと立ち上がり正面から抱き着いてきた。

俺の胸に顔をうずくめてウーウー言ってる。

（はぁ・・・元気だなあ。）

「とりあえずソファに座ろう。」

そう言い綾とソファに座ったわけだが

「・・・お前、どこに座ってたんだ。」

「ん？お兄ちゃんの膝の上だよ？」

そう言い正面に向き合って式の胸につき、頬ずりをしながら甘い声を出す。

「んふふふつ。お兄いちゃん。」

二人の体は密着していて綾の肌の感触が衣服を通して伝わってくる。透き通るきれいな白くやわらかい肌、まだ発育途中だがそれなりに膨らみがある胸、そして髪の毛からほのかに甘いシャンプー香りが漂ってくる。

「ねえ、お兄ちゃん・・・」

すると綾が顔を上げ、式を見つめてくる。

「ん？なんだ？」

首に手を回し、顔を近づけてくる。

そしていきなり、キスされた。

やわらかい唇の感触が伝わってくる。

何秒経ったかわからない頃になってようやく綾が唇を離す。

そして頬を赤くし、俺に満面の笑みを向けて言った。

「お誕生日おめでとう、お兄ちゃん。」

時計を見ると12時をちょうど過ぎた辺りだ。

8月25日、今日は俺の誕生日だ。

いきなりのサプライズで戸惑ったが取り合えず言っておいた。

「・・・ありがとう。」

あと十数分で兄の誕生日。

兄は現在入浴中、時間までに上がってくるといいのだが。そこでソファに腰かけ、今日の出来事を思い返す。

結果を述べると邪魔者が二人増えた。

しかも二人とも人柄が良さそうな結構な美人だ。

姉の方はまだそれほど危険視する必要はないが、妹の方は警戒する必要がある。

あの歳であれほど見事に育っている胸、おそらくDカップはあるだろう。わたしも容姿には自信があるが胸の大きさは彼女に完敗だ。

（まあそんなことは大したことじゃないんだけど・・・）

兄は女の色仕掛けに引つかかるような間抜けではない。

自分では気づいていないようだが兄はただでさえ“あの”容姿だ。女が近づいて来ないわけがない。

これまでもさまざまな女が言い寄ってきたが興味を示さなかった。

元々あの人は他人に大して興味など抱かない。上辺では人を気遣ったりするが基本的に無関心だ。

兄がまともに関心を持っているのは妹であるわたしと数人の“特別な人間”だけだろう。

なかでもわたしは兄と一緒に暮らしていて、いつも可愛がってもらってらっているのが兄が一番関心を持っているのはわたしだと言っても過言ではないと優越感に浸ることもできる。

けど、たまに兄を見ていて思う。私を含め、あらゆるものを見ているその目は確かにそれらを見ているのだが、その目に映っているのはそれらではない、“特定のなにか”、あるいは“誰か”といった感じがしてならない。

まるでわたしよりも“他の女”のことを考えているような

もしそれが事実であればそれはわたしにとっては死活問題だ。

わたしにとって兄が全てであるように、兄にとってわたしが全てでなければならぬのだ。

だからわたしはあと数分で来たる兄の誕生日に女としてさらに一歩近づこうと決めた。

“誕生日のサプライズ”と言う名目でさらに兄を感じることができるのだ。

口づけを交わすことによって

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559ba/>

第一章

2012年1月15日03時48分発行